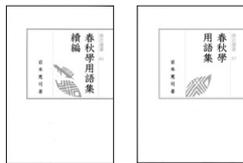


〈読書〉の真髄——岩本「春秋学」学の世界

野間 文史



岩本憲司著
春秋学用語集
 278頁 [3150円]
春秋学用語集 続編
 270頁 [3150円]
 汲古書院 四六判

我々は春秋学研究への新たな橋頭堡となるべき両冊を得た。著者岩本憲司氏は我が国に於ける春秋学研究の第一人者である。今から三十余年前の「公羊三世説の成立過程」（『日本中国学会報』第三二集 一九八〇年）・「春秋学に於ける「孔子説経」説話について」（『東方学』第六五輯 一九八三年）等の論文以来、一貫して独創的な見解を開陳してこられた。評者はそのたびごとに多大の学恩と刺激とを受けてきた者の一人である。而してその独創的な研究成果は、かえってオーソドックスな〈読書〉によって生み出されたものであった。そのことを如実に示しているのが、『春秋穀梁伝范甯集解』（汲古書院 一九八八年）・『春秋公羊伝何休解詁』（同上、一九九三年）・『春秋左氏伝杜預集解 上・下』（同上、二〇〇一年・二〇〇六年）の三部作、四巨冊である。この『春秋穀梁伝范甯集解』に序

文を寄せた戸川芳郎氏は、岩本氏の「勉学の方法」を次のように解説しておられる。

元来、氏は資料研究の方法を文字どおり終始徹底の〈読書〉におき、あらかじめ選別してカード化したり、索引にたよってつまみ食いしたりすることを避け、悉皆みずからのことばに通訳して筋を通すことを重ねつづけた。これは、およそ文献研究にたずさわるものにとつて、だれしも望むべくして為し遂げがたい工作である。

また岩本氏自身もその「あとがき」で、

訳者の研究テーマは、本来、漢代《春秋》学であり、目標は、漢代《春秋》学研究を通じての漢代思想史解明にある。本書は、訳者のこのような研究に於ける基礎的作業とも言える、原テキストの読み、の文字化であり、い

わば、研究過程の副産物である。経伝等を、聖典としてではなく、資料として読むべきことは、学問研究に於いて、当然のことであるが、その際、訳者は、常に、テキストを、断片としてではなくて、全体として、すみからすみまで通読することと、読みを、そのつど文字化して、自分の読みとして定着させることに、心がけ、また実行している。かくて、一書を読み終えることに、一書の訳稿が出来上る、というわけである。

と述べた後さらに「今回、公刊するのは、そのようなもの一部であつて、本来、翻訳自体を目的としたものではない」と続けているが、上記三部作は実に空前の学術成果である。

なぜならこの三部作の刊行以前には、日本語訳として、『梁伝』は和刻本を除けば皆無、難読の『公羊伝』は日原利国氏の四十条の部分訳（『五経・論語』筑摩書房世界文学全集3一九七〇年）が有るばかりであつた。加えて三伝の注釈書である范甯『集解』、何休『解詁』、そして杜預『集解』まで含めた翻訳は、絶無に近いからである。これを独力で完成された岩本氏を、戸川氏が「当代に稀な意志と体力の保持者というほかない」と評するのはまことに妥当であろう。

この三部作を、評者は事あるごとに参照させていただいているのであるが、その正確な翻訳、周到な訳注から、やはり

多大な恩恵を受けてきた。この三部作こそ経学・春秋学研究分野を越えて、我が国に於ける中国古代学研究的金字塔たることを評者は信じて疑わない。

以上は長い前置きであるが、長くなったのには理由が有つて、この書評で取り挙げる『春秋学用語集』・『春秋学用語集続編』の両書は、上記三部作と密接に関わる著作だからである（以下「前著」「続編」と略称する）。岩本氏は前著の「おわりに」でその著作意図を次のように述べている。

数年前から、拙訳（書名省略―評者）の見直しを始めた。すると、あるはあるは、反省すべき箇所が次々と見つかった。お恥しい話ではあるし、作業も途中なのだが、とりあえず、本書をもって中間報告とすることにした。つまり、本書は、名称は「用語集」だが、実は、上の四冊の改訂を兼ねているのであり、だからこそ、公表の義務があると考えたわけである。

つまり本書は「春秋学」の用語を解説する形を取りつつ、三部作を見直したその詳細な経過を記述するのが、その内容となつている。密接に関わる著作とは、このことを意味する。

さて前書は「一般篇」と「特殊篇」とから成り、続編は「特殊篇」のみである。その「一般篇」とは、著者によれば、

本篇は、春秋学の用語のうち、一般的ではあるが陳腐で

ないものを集めて掲げ、辞典風に簡潔な解説を附したもので、後の特殊篇に対する、いわば予備的部分である。

また「特殊篇」とは、

本篇は、普通の語学的アプローチではなかなか明らかにし難い春秋学の特用語語について、「春秋学」学の立場から、専ら論理的に分析を試みたもので、本書の主要部分である。

と説明されている。その具体的な用語は以下の通り。

【一般篇】春秋・春秋学・孔子説経説話・感生帝説・天統・偏戦・離会・義例・修母致子説・文質・獲麟・遂事・原心定罪・左史・赴告・三伝長短・再受命・本事・三世・春秋説・何休学・苾盟・捩乱・微言大義・孔子史記・強幹弱枝・通辞・端門之命・微辞・豪釐千里・三統・空言・属辞比

事・後聖・卯金刀・七等・大一統・三科九旨・五始・災異説・素王・秘教

【特殊篇】

分民・不嫌・喪至・主書・以名通・無大夫・無王・微者・起文・当国・齊人語・引取之・悪愈・従可知・躋僖公・懷悪・王魯・内辞・無伝・刑人・孰城之・鄭伯も也・孟子・中国・渝平・文実・中壽・以春秋為春秋・従不疑・伯子男一也・不以者・可辞・吾已矣夫・所致・禮經・夏不田・紀叔姬・因国・武宮・不教民・両事・不致之辞・逆祀・諸侯・母弟・成宋乱・為禮・政在季氏・日卒・言伐者（以上前書）不若・近乎困・高顕・大雨霖・郭公・親周故宋・託義・兄弟辞・私行・上殺・不言使・晦・外討・隱之也・親弑・諛君・無時焉可・不終為君・為善也躬・魯侯之美惡・婉辞・復見・大德・据禮・辞窮・故



遊日龍の道

タオ

台湾客家・游道士の養生訓
林郁著 2310円

平和とは、健康とは、道教とは何なのか。道教の国台湾において戦後、台湾道教崑崙門を再興、平和と健康を説く游日龍道士92歳。日本軍に徴兵され戦った南方戦線で記した「戦場日記」も収録。貴重な資料である。

変わる世界 変わるか日本

久保孝雄 著

1995円

対米自立と
日中共生へ



東洋書店

〒162-0805 東京都新宿区
矢来町97 TEL 03 (3269) 2961
www.toyoshoten.co.jp

春秋左氏説・譎而不正・信史・書時也・与謀・継故・幸之・平乎己・決日義・有顧之辭・一称・為外・主名・制作之害・謂文王也・以為王法・蒙上月・義亦通於此・天數備・君之始年・在内・尽其衆・不言正不正・繫諸人也・兵器之獲・人心・知其不可知・踰月・祭叔來聘・暨齊平
(以上続編)

ご覧の通り「一般篇」には春秋学を学ぶうえで必須ともいふべき用語が取り挙げられていて極めて有益であるが、たとえば「孔子説経説話」が岩本氏の命名であることから分かるように、その解説もやはり著者の獨自性が随所に伺える。望蜀の思いを述べるなら、もう少し「一般篇」を続けていたできたかった。

そして続く「特殊篇」こそが本書の中心であるが、取り挙げられたのは、三伝のみならず、何休・杜預・范甯注の中の用語であり、その内容は極めて専門的だと言わねばならない。書名から「辞典風」な内容を予想した読者の中には、ここに至って面食らった(?)方があったかもしれない。

さて三部作の「見直し」箇所はここに記述されている。更なる「読書」によって、著者自身が「反省すべき箇所」として指摘したのは、前書で一四箇所、続編で一三箇所であり、そのたびごとに「この場をかりて、お詫びし、訂正したい」

と繰り返して述べている。しかし評者の見るところ、これらの中には旧注に従った翻訳や、先行研究(王引之・俞樾など)に依拠した解釈も含まれており、厳密には誤りと言えないものも有り、また著者にして初めて発見できたものも多いかと愚考する(たとえば何休注「王国主名」を「あるじの国のおもだった人」と解する考証等)。むしろ三部作全二七〇〇頁を越える大冊からすれば、驚くほどに少ないのではあるまいか。読者は、その指摘に至るまでの「論理的な分析」に圧倒されるであろう。著者の「読書」の緻密さを何うに充分である。

したがって、このような自己の著作に対してさえ厳しい批判の目を持つ著者が、先行研究にその目を転ずるとき、無傷でいられるものは稀である。特に続編では、先行研究が個別に集中的に検討の俎上に載せられている。平勢隆郎・日原利国・富谷至・吉川忠夫・蜂屋邦夫・安井香山・中村璋八・佐川修・小倉芳彦・重沢俊郎の諸氏並びに評者(野間)等、また著者自身が所属していた公羊注疏研究会がそれである。評者もできれば外野席から眺めたかったところである。

もとより批判された諸氏を代表する資格は評者には無いが、こと評者の場合に限るなら、論理と資料・文法等の多方面からなされる著者の実証性に富んだ批判は、ほぼ妥当である。評者としては全く不勉強・不注意を恥じるばかりである。

中国研究所 会員制度のご案内

当研究所は、中国およびアジア諸国との友好を願う立場から、現代中国の政治、経済、社会、文化、歴史を科学的に研究する民間研究機関として、1946年1月に創設されました。以来今日にいたるまで、出版物の編集発行、専門図書館の運営を活動の柱とし、日本における中国の調査・研究の拠点として歴史を重ねてきました。

中国研究者および広く中国に関心のある方々の参加と交流を目的とした個人向けの研究会員制度を設けております。当研究所の趣旨をご理解の上、入会をご検討いただけますよう、何卒よろしくお願い申し上げます。

60年以上の歴史を有する研究所として、会員の皆様により充実したサービスを提供できるよう努力してまいります。

【研究会員】

会費：9,600円(1年間)

学生会員：5,000円(1年間)

【会員特典】

- ・当研究所発行の学術月刊誌『中国研究月報』の無料配布
 - ・当研究所主催の公開講座等の参加料割引
- 詳細はお問い合わせください。

一般 社団法人 中国研究所

〒112-0012

東京都文京区大塚 6-22-18

TEL: 03-3947-8029

FAX: 03-3947-8039

e-mail: c-chuken@tcn-catv.ne.jp

URL: <http://www.chuken1946.or.jp/>

と同時に四半世紀前の拙著にまでも目を通して下さった著者に感謝すること深甚である。機会があれば訂正したい。

以上、はからずも感嘆と賛辞とに終始するばかりとなったが、以下、若干の不満も申し述べておきたい。内容に関するものではなくて、表現方法の問題である。

先ず本書には段落が無いことが挙げられる。段落は或るまとまった主旨表現の単位であるから、著者のお考えをお聞きせねばなるまいが、読者としては是非とも「息継ぎ」がほしい。たとえば前書【言伐者】の項目(二四八頁)では、一四頁にわたる全文に段落が無い。評者に許されるなら、少なくとも二箇所に段落を設けるところである。

次に長い引用文(とその訳文)の場合は、二段下げなどとして、それが引用文であることを明確にしていたただきたかった。ま

た著者は本文中で注釈を(一)内に記述することが多い。しかも長文の場合も少なくない。これもポイントを下げると、読者は理解が容易となるのではないか。著者の文章自体は極めて明快であるが故に、もう少し読者への配慮を望みたい。

なお私事で恐縮であるが、評者は著者岩本氏と一度だけ面談する機会があった。平成一九年度第五二回国際東方学会議のシンポジウム「両漢における『春秋』三伝の相剋」で二人ともにその発表者であったからである。池田知久氏によつて、このシンポジウムの報告(『東方学会報』No.92)がなされているが、その中に「『左氏伝』の成立に関して野間文史教授と岩本憲司教授が真つ向から対立するなど、報告者の見解は決して一つにまとまっているわけではない」という一文が見える。あたかも華々しい論争が行われたかにも思える

報告であるが、実際には論争は無かったし、また決して「真つ向から対立」してはいないのである。

岩本氏と評者の経学・春秋学研究に対する立場とその出された結論には、大略それほどの違いは無い（と愚考する）。すなわち経書が武帝時代のいわゆる儒学の「国教化」によって確定すること、つまり経学がここから始まるという見方は同じである。また『公羊伝』が前漢景帝時代を背景とし、『穀梁伝』が宣帝時代に成立したものと見なす点でもほぼ同様である。問題は『左氏伝』の成立に関わる見方であろう。岩本氏は『左氏伝』について次のように述べている。

そもそも『左氏伝』とは、筆者が思うに、『春秋』経と共通する事件が数多くしかもより詳細に描かれている何らかの説話集を借用し、そこに『公羊伝』や『穀梁伝』のような（経解）の言葉を加えて、『春秋』経の伝（解説）としての体裁を整えたものである。（統編一八二五二頁）

この文章に対しても、それほど異論は無い。詳細はここで説明できないが、評者は氏のいわゆる「何らかの説話集」が編纂された時期を以て（あまり適当な表現ではないが）、初期『左氏伝』の成立時期と考えているのである。いわば完成されたものと素材が集められた段階のものとの違いと言えるであろうか。もしも『左氏伝』研究に頂上が有ると仮定するとして、

著者岩本氏とその頂上で握手できることを夢想している次第である。

最後に、著者の基本的な考え方として、「義」を説く『公羊伝』『穀梁伝』から「事」を説く『左氏伝』へ、という津田左右吉氏以来の構図が有るが、近時の出土文献『郭店楚墓竹簡』中の『語叢一』に、「春秋所以会古今之事也」とある一文に対するお考えをお聞きしたいところである。

（のま・ふみちか 広島大学名誉教授）

日中翻訳学院「武吉塾」第二期スクーリング。

『日中中日翻訳必携 実戦編』出版記念会のご案内

日中翻訳学院「武吉塾」第一期スクーリング、および武吉次朗先生の新刊『日中中日翻訳必携 実戦編』出版記念会を下記の要領で開催いたします。ふるってご参加ください。

▼日時：2月1日（土） 14時～16時30分（13時30分より受付）▼場所：豊島区勤労福祉会館（第七会議室）（東京都豊島区西池袋2-37-4 TEL03-3980-3131 池袋駅西口徒歩約10分・南口徒歩約7分）▼会費：一、〇〇〇円（茶菓代。当日受付で申し受けます）▼申込方法：メールで日中翻訳学院事務局（fanyj@dtan.jp）宛てにお名前とご連絡先（住所・お電話番号）をご記入の上、お申し込みください。